

ホームページ <http://www.nihonkanpoukyokai.com/>

E-mail: j.kampo@jeans.ocn.ne.jp

日本漢方協会通信 - ①

令和4年3月

矢数圭堂先生

ありがとうございました

当協会の設立時の発起人の一人で、現在は名誉講師をなさって頂いていた矢数圭堂先生は2月15日に90才で天寿を全うされました。当協会にご尽力をいただき感謝しております。

昭和44年の11月8日～9日に小太郎漢方製薬主催の東北地区研修会が行われました。その帰りの車中で、矢数圭堂先生・根本光人先生（2月に講義をいただいた根本幸夫先生のお父様）



・上田小太郎漢方製薬社長・鈴木五郎小太郎漢方製薬東京支社長が「正統漢方の普及のため全国統一の勉強会が必要」ということで日本漢方協会の前身である「日本漢方協議会」を発足しました。矢数先生のお力で新宿の東京医大の同窓会館を使わせていただきました。先生には多方面に渡ったお力をいただき感謝の気持ちでいっぱいです。心からご冥福をお祈り申し上げます。

コロナの問題で新年会や催し後の懇親会が開催できず、矢数先生の美声をお聞きできなかったことが残念です。 (三上記)

【略歴】

1957年東京医科大学卒業 東京医科大学薬理学教室で原三郎教授の指導により医学博士の学位を受ける
その後、父・矢数道明について漢方医学修業

1966年大宮一貫堂矢数医院にて診療を開始

1968年日本東洋医学会 理事

1976年昭和大学医学部 非常勤講師

1982年北里研究所東洋医学総合研究所 客員部長

1987年日本東洋医学会 副会長

2003年東亜医学協会 理事長

【現職】

2002年温知堂 矢数医院 院長

2002年温知会 会長

2007年東亜医学協会 会長

【主な著書】

漢方処方大成

■矢数道明・矢数圭堂博士の病気別症状別漢方処方（主婦の友社）1979年

■矢数圭堂監修 漢方処方大成（自然社）1988年

■矢数圭堂・松下嘉一監修漢方治療指針（緑書房）1999年

日本漢方協会通信-②

日本漢方協会講義を聴講して(2022年2月20日分)

会員 角屋敷俊二

2月20日、日本漢方協会主催の漢方総合講座を聴講しました。会場はワйм貸会議室赤坂スターゲートプラザ地下1階で、会場満杯の中、講座が始まり4題の講義がありました。

「漢方基礎理論」では小山直弥学術委員から五行説の解説があり、その概要から始まり、暮らしの中に溶け込んだ陰陽五行思想の事例などの解説と進みました。特に「木火土金水」の詳しい特性解説、季節・機能・感情変化・顔色など属性ごとに関連性を図示しながらの解説は、理解しやすく参考になるものでした。

「生薬解説」では八木多佳子学術委員から柴胡と半夏の解説があり、基原等から関連薬方まで詳しく解説されました。治験例に出てくる「使用したある漢方薬エキス製剤」とは柴胡桂枝乾姜湯だそうです。

今回は「漢方トピックス」が2題取り上げられました。

1題目は「生薬の薬能～伝統医学用語で表現される効能～を科学する」のテーマで名古屋市立大学大学院薬学研究科医療分子機能薬学講座生薬分野教授・牧野俊明先生の講義でした。

古来本草書に各生薬の様々な薬能が記述されておりますが、多くは経験知でありそのまま受け入れるしかないものという理解でした。講義は、それらの感覚的表現を翻訳し関連する成分を分析し、有効成分を特定する、薬方内での役割を解き明かす等、生薬薬能を科学的に見てゆく研究の成果でした。「科学的」についてあらためて考えさせられました。

2題目は「日本漢方と中医学の違い」のテーマで横浜薬科大学漢方と漢薬調査研究センター特任教授・根本幸夫先生の講義でした。古方を軸に古典などを読み、解説を受けながら、漢方を学んできた自分にとり、近頃流行りの中医学は、文化大革命後のどさくさに出来た異端のようなものと思っておりました。講義では、中医学の系譜、日本漢方との差、度量衡の違い、エキス剤の違いなどが説明されました。中医学は鍼灸理論や傷寒論等の漢方薬との最大公約数のような形になっているので注意を要すること、傷寒で治らない温病の概念への注意、などを脈診や薬対などの話題も織り交ぜながら説明されました。「中医学を学ぶ時には、日本漢方をしっかりと知らないで混乱するばかりなので注意するように」とのアドバイスを大切にしたいと思いました。

以上4題の聴講を終え、充実感に浸りながら、爽快な気分で家路に着いた次第であります。

日本漢方協会通信-③

日本漢方協会講義を聴講して(2022年2月20日分)

会員 野中敬司

日本漢方協会の講義は一回ごとに漢方の基礎理論、生薬解説、最新の漢方トピックが聞くことができます。

基礎理論は、五行説から占いに至るまで幅広く教えて頂きました。生薬解説は、柴胡と半夏のプロフィールと処方鑑別のポイントを教えて頂きました。漢方トピックは、牧野先生と根本先生で、根本先生からは漢方と中医学の違い、鍼灸や湯液が適している状態について教えて頂きました。

今回特に私が印象深かった講義は牧野利明先生の「生薬の薬能～伝統医学用語で表現される効能～を科学する」でした。

講義では、ブシの散寒止痛には、ブシの成分として知られていなかったネオリンが効いていると、教えて頂きました。

自分自身が骨折後、寒さに曝されると痛みが強くなるので、自分の事として聞くことができました。漢方を買って求める患者さんの中には、辛い症状が治まるのなら、いくら支払ってもいい。症状が辛くて鬱になる。と言っていらっしゃる方がいます。そういった切羽詰まった患者さんに、少しでも症状の緩和をしていただける、漢方から生まれ漢方と相性のいい薬が今後できるかもしれないとワクワクしました。

【3月20日講義「生薬解説」予告】

草木に目を向けると、今の時季ハクモクレンの蕾を見つけることができます。ハクモクレンの蕾は生薬の辛夷です。花粉症の鼻閉症状治療に有効な生薬に辛夷があります。スギ花粉症の症状が出始めるこの時季に花粉症治療に使われる生薬が採取できることはとても興味深いです。

辛夷の薬味は辛。薬性は温・瀉・燥・升・散です。

一般的に聞き慣れない薬性があるかもしれません。

瀉とは瀉薬のことで、体内の余分なものを体外へ出す薬です。

対する薬性は補薬で、体を補い強化する薬です。

燥とは燥薬のことで、体内の水分を排泄する薬です。

対する薬性は潤薬で、体内の水分を保留し、体を潤す薬です。

升とは升薬のことで、興奮・止瀉・下部出血の防止など、作用が上に向いて働く薬です。

対する薬性は降薬で、鎮静・瀉下・上部出血の防止など、作用が下に向いて働く薬です。

散とは散薬のことで、発散・発汗など、作用が外に向かって働く薬です。

対する薬性は収薬で、収斂・止汗など、作用が内に向かって働く薬です。

3月の講義では、黄連、黄芩と関連処方の生薬についての薬性・薬味についてお話しさせていただきます。

薬剤師研修・認定電子システム (PECS) 対応に関する情報

【日本薬剤師研修センター】ホームページ
薬剤師研修・認定電子システム(PECS)について
(令和3年3月29日修正版より)

詳細は、日本薬剤師研修センター ホームページをご確認ください。

[日本薬剤師研修センター \(jpec.or.jp\)](https://www.jpec.or.jp)

<https://www.jpec.or.jp/index.html>

日本漢方協会主催 各種講座受講における 『薬剤師研修センター 認定単位』の扱いについて

- 一般社団法人 日本漢方協会(以下、当協会)は、公社)薬剤師研修センター(以下、研修センター)の『漢方薬・生薬認定薬剤師制度』における、研修実施機関(集合研修)として登録されました。
- また、当協会主催の『漢方総合講座』は“必須研修対象研修会”として承認されておりましたが、研修センターの新システム(PECS)においても承認される予定です。(各開催日毎に承認を受けます)
- 新システム(PECS)では、従来配布されておりました研修受講シールは廃止され、令和4年4月より、薬剤師個別に付与される【QRコード】により管理されることとなります。
- 当協会の各種講座におきましても、【QRコード】の読み取りシステムにて対応することとなります。
- **受講単位を希望されます方**は、PECS登録・ユーザーIDの取得・QRコードの取得・印刷などのご準備をお願いいたします。
- 当協会といたしましては、順次、研修センターの指示に従い準備を進めております。**各個人のご対応は、研修センターにご確認ください。**
- よろしくご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。